

## 神への忠実／福音に仕える僕の務め

使徒パウロが第1章からずっと取り扱っている問題は、教会に不一致と分裂を起こさせるコリント教会内の「分派争いの問題」であった。教会内の或る者たちが「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はペテロに」と、使徒や伝道者を自分たちの頭に祭り上げて、グループを作って互いに他を批判しさばき合うという、悲しむべき事態が起こっていた。パウロはこれに心を痛めた、悲しんだ。そして情熱をこめて彼等の誤りをただし、「福音とは何か」「教会とは何か」「神に生きるとは」「信仰に生きるとはどういうことか」を語ってきた。

そして今日の個所で使徒パウロは、自分たちが単なる「僕」にすぎないことを表わそうとして2つのイメージを用いる。第1は「仕える者」（ヒューパーレーテース）で、もともと船底で汗水をたらして魯を漕ぐ奴隷のこと。これが転じて主人のために一生懸命下積みの仕事に従事する僕（しもべ）の意味になった。第2は「管理人」（オイコノモス）。家に仕える管理人、家や財産を任された家令や使用人を意味する言葉である。

ここでパウロの言いたいことはこれである。私たちは僕であって主人ではない。管理人であって所有者ではない。私たちはただ、僕としてまた管理人としての務めを与えられて、それに忠実に仕えている者にすぎない。だからもし、崇められるべき者がいるとすれば、僕である私たち、管理人である私たちではなく、主人であるキリストではないか。その僕である私たちを頭に祭り上げて互いに誉れを競い合うとは何事であるか、そうであってはいけない、「ただ神のみを崇め神からの誉れを求めて生きよ」と言う。

ここには、いつでも神の前に忠実／真実に生きる人、神から与えられた自分の務めに忠実に生きる使徒パウロの姿がある。神の前における使徒パウロの徹底した謙遜の姿を見る。

更に彼は言う、「私にとってあなた方から裁かれようと、人間の法廷でさばかれようと少しも問題ではない。私は自分で自分を裁くことすらしない。自分は何もやましいところはないが、それで私が義とされているわけではない。私を裁く方は主である』と。

彼は、自分に与えられた使命を忠実に果たしていると言うことができる人であった。反対者たちに対して、自分の真実を主張することが出来る人であったが、同時に、自分が神の前に依然として罪を負った存在であり、神に対して決して自分の義を主張することの出来ない者であることを、本当に知っている人であった。

その神の前に真実に生きる、自分を正しくさばく御方は主なる神であって人ではないということを知って、人を軽々しく裁かない、また人のさばきや評価を気にしない、人の評価や人の裁きに一喜一憂しない、ただ神のみを恐れて生きる、人間の評価ではなく、「暗い中に隠されていることを明るみに出し、心の中で企てられていることをあらわにされる」神のみを恐れ（5節）、その神の前に真実に生き、その神からのみ誉れを求めて生きる、――これがキリスト者の生き方であることを使徒パウロはコリントの人々に教えるのである。